



嘉門雅史新理事長

建設現場などで発生する泥土の再資源化が加速する中、(一社)泥土リサイクル協会が創立20周年を迎えた。節目の年となる今年、理事長には土木工学や環境地盤工学の第一人者である嘉門雅史氏(元京都大学大学院地球環境学堂長)が就任。再資源化の高度化と人材育成に注力し、協会の新たな展開に舵を切る。

同協会は2005年、大根義男・愛知工業大学名誉教授を初代理事長に設立。以降、木村孟・元東京工業大学長が13年間にわたり、業界の基盤を支えた。そして創立設立20周年の節目を迎え、3代目を継いだ嘉門氏は、「木村先生からの要請と、協会活動への共感から就任を決意した」と語る。80歳を迎える今もお現役で、豊富な知見をもとに次世代への

嘉門雅史氏が理事長に就任

泥土リサイクル協会

創立20周年を迎え、新たな挑戦へ

技術継承とリサイクル技術の革新に取り組む。

嘉門氏は1968年に京都大学工学部を卒業後、同大防災研究所教授、地球環境学堂長などを歴任。環境大臣

表彰や文部科学大臣表彰など受賞歴も多く、環境地盤工学研究所理事長として現在も研究と教育に携わる。

協会では建設汚泥だけでなく、浚渫土砂や災害堆積土、さらには副産物である石炭灰や製紙スラッジ焼却灰、廃石膏ボードの活用にも注力。こうした取り組みを通じて、持続可

能な社会構築に寄与している。ただし、行政との連携や制度の継続意欲を見せる。

嘉門氏は「技術者と行政の相互理解を深める環境教育が不可欠」と強調する。特筆すべきは、大阪の大和川線シルド工事での大規模なリサイクル導入事例。個別指定方式を活用し、現場内での資源循環を実現した。

また嘉門氏は、若手技術者の育成にも注力。YouTubeを活用した講座を通じ、実務と学術を融合した教材を提供予定で、

「キル向上が業界全体の底上げにつながる」と意欲を見せる。今後は、工事現場内や現場間での泥土利用促進、カーボンニュートラルに向けた技術導入が鍵となる。嘉門氏は「環境負荷の低減とともに、泥土リサイクルは産業としての発展も可能と展望を語る。8月27日には名古屋市内で創立20周年記念式典を開催。嘉門氏による記念講演「泥土リサイクル beyond NEXT(仮)」も予定されており、新たな展開に業界の関心が高まっている。